

葛藤と交渉

Conflicts and Negotiation

日常的実践としてのフェミニズム

Feminism as Everyday Practice

北村文
KITAMURA Aya

1. パフォーマティヴィティのあと

重要なのは、私たちがフェミニズムの定義のために用いようとするはそれ自体が既に、精練され、多元化され、棄却あるいは脱構築されていて、もはや容易に採用できるものではなくなっているということだ。「女性」を代表してフェミニズムを定義しようとするのであればなおさら、それは不可能である。こうして私たちは、政治的実践に従事しているにも関わらず、その目標はもちろんのこと、実践としてのそれそのものを定義することができないという、パラドクスのなかに招来されることとなる。[Kavka 2001: x]

フェミニズムとは何か、女性とは誰か。「女」をめぐる闘争のまさに内部から提起されたこの問いは、これもまた逆説的に、「女の統一性」が幻想に過ぎないということを含意している。たとえば第三世界フェミニズムやレズビアン・フェミニズムは、女性のなかの「他者」の存在を指摘し、女性のための連帯や団結が、他方で排除や抑圧につながることを鋭く批判してきた。「女」として括られたカテゴリーにさまざまな差異が内包される以上、そこに一義的に共通性を想定することは不当であり、暴力的でさえあるという事実に、私たちはもはや無自覚ではいられない。

こうしてもたらされるパラドキシカルな、困難な状況は、しかしながら、「女」を語ることが不可能／不必要になった（「フェミニズムは終わった」）ことを意味しないだろう。理論家たちはここからさらに、多種多様な変数

が混在する人々の集合を「女」として固定化する、そのメカニズムに焦点を移してきている。C. Delphyは、第二波フェミニズムによる「生物学的性差／セックス」と「文化的性差／ジェンダー」の二元論が、前者を暗黙のうちに実体視するものであると批判し、ここに決定的転換を持ち込む。彼女の強調は、ジェンダーこそがセックスに先行するということ、そしてジェンダーとはふたつの項（「女と男」）ではなく分割（「女／男」）だということにある。この認識によって私たちは、「分割された部分から分割原理そのものへと重点を移動できる」[Delphy 1991=1998: 44]。また、ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」とラディカルに再定義し、その歴史的構築過程を追跡する J. W. Scott の作業もまた、同様の衝撃を有している [Scott 1988=1992]。

先験的な差異を措定せず、それを生み出す慣習や制度に照準するポスト構造主義のジェンダー理論は、さらに新たな地平を切り開く。J. Butlerは、フェミニズムがまさに基盤としてきた「女」というアイデンティティの実体性をも切り崩し、それはジェンダーという「言語」を使用することによって初めて構築されるものに過ぎないと説く。加えてこの言語使用は、単に何かを表出するだけでなく、「行為遂行性／パフォーマンスィヴィティ」を含む。そのつど線を引き直すということは、既成の意味を再生産し強化する一方、新たな意味づけやズラしといった攪乱にもつながるのである [Butler 1990=1999, 1997=1998]。ここにおいてジェンダーは、生物学的基盤を離れ、慣習や制度に埋め込まれた権力を不可避的に呼び起こしながらも、人々の言説実践のなかで流動的に発現するものとして捉え直される。

これを踏まえて、フェミニズムの関心は急速に言語／言説の作用へと向かう。「女」をナイーヴに措定することはもうできない。照準すべきは、それを成り立たせている言語の側であり、そこに潜む権力である。なぜなら、「この権力の磁場の外側にどのような立場もありえず、ただできることは、権力がみずからの正統化をどのようにやってきたかを、系譜的に、批判的にたどることだけである」から [Butler 1990=1999: 25]。こうしてフェミニズムは、実体としての「女」を超え、そのメタレヴェルに視点を獲得することになる。

このように導かれる代替的方向性は、しかしながら、決して全ての困難を免れてはいない。その背後には、既存のジェンダーが抑圧的で暴力的であるという、経験的にはじゅうぶんに検討されないままの前提が、暗黙裡に滑り込んでいることに注意しよう。「女」の多様性を認めるのであれば、ジェンダーがあらゆる文脈や状況で恒常的に悪であるというその判断の妥当性をこそ、問い直さねばならないにもかかわらず。その結果、リアリティの経験のされ方に含まれる差異は捨象され、行為や発話は既存の権力関係に及ぼす影響から一元的に量られ、評されることとなる。すなわち「再生産か、攪乱か」「従属か、抵抗か」の篩いにかけて、当然のことながら、後者のみが賞賛されるのである。さらに看過できないのは、「女」を言語的構築であると捉え、そのパフォーマンスな過程をみることができるのは、実のところ研究者であるフェミニストに限られているという点である。しかし日常生活世界には「女」という構築されてしまったリアリティがあり、人々は依然としてそれと対峙して生きていかねばならない。これらの問題は必然的に、「騙されている愚かな女たち」と「見通せる批判的な女性（フェミニスト）」との分断を招く。

もしもフェミニズムが女性たちのために「声をあげる」ことを主張する一方で、彼女らをフェミニストに劣る者として無視しようとするのであれば…、さらに、もしも歴史的に構築された「フェミニスト」というアイデンティティが、「普通の女」を劣位の他者として位置づけるのであれば、フェミニズムが拒絶されるのは驚くに値しない。[Hollows 2000: 203]

果たして私たちはここからどこへ、どのように進むことができるだろう。「女」という経験やアイデンティティをすべてナイーヴな幻想だと切り捨てること、あるいはそこに一定の価値を持ち込むことは、もうひとつの暴力に他ならない。それに対しても無自覚でいられない以上、拡散する「女」を前に、歩みを止めるしかないのだろうか。

いやむしろ、ここでもう一度、避けて通ることのできないこの多様性や複雑性そのものに、焦点を当ててみる必要がある。文化的に歴史的に、そして権力的言語によって、創られてしまった、そして依然として生きられ

ている「女」というリアリティに、徹底して寄り添うことは、未だじゅうぶんにはなされていない。それはたいていの場合、研究者による「従属か、抵抗か」の枠組みに回収されてきた。しかし、ジェンダーを実践として捉え直したことの意義は実は、その過程に横溢する様ざまな行為や発話、そしてその意味や価値それ自体への視座を切り開いたことにある。性急に抑圧や抵抗を読み込み、ただ解体だけを志向するのではなく、実践されるジェンダーにこそ、フェミニズムの繊細かつ丁寧なまなざしを注がなければならない。

2. 女性たちのリアリティ——「従属か、抵抗か」を超えて

2-1. 行為、身体、アイデンティティ

フェミニストが、その救おうとする女性たちに対して抑圧や抵抗だけを看取り、その結果彼女らのリアリティを一方向的に判じてしまうという、皮肉な暴力のかたち。これに警鐘を鳴らすには、個別具体的なフィールドに定位する経験的研究の蓄積をみるのが重要である。エスノグラフィーやフィールドワークの知見が示唆するのは、まさに「女性たちのリアリティ」の豊かさに他ならない。具体的な調査研究を参照しながら、その発見がフェミニズムにもたらしうるものを考えていこう。

ジェンダーを深刻な問題として際立たせる日常的相互行為場面のひとつに、職場がある。不平等な雇用慣行や給与体系、セクシュアル・ハラスメントなど、そこには「女／男」を軸とする権力関係が明示的にも暗示的にも張り巡らされており、ジェンダーを考える研究者の関心が集められている。まず一例として、小笠原祐子が注目するのは、日本企業における「OL」たちが、組織のなかで圧倒的に不利な地位に立たされながらも、男性社員に対する「ゴシップ」や「総スカン」を通して、「レジスタンス」を企てる様子である [小笠原1998]。OLの存在は、これまで多くの場合、統計的データによって記述されるに留まるか、ともすれば「従順で性別役割分業を内面化した日本女性」というステレオタイプのもとに理解されてきた。これ

に対して小笠原のインタビュー調査は、組織行動という新たな視点から「弱者がもつようになる奇妙な優位性」[: 168] を克明に描き出す。さらに、この「レジスタンス」は、労働状況におけるジェンダー制度を打破せず、むしろ強化するものであるという点が強調される。小笠原は言う、「OLが、ジェンダーを武器に優位を形成しようとするほど、ジェンダーの深みに入ってしまう。まるで、個々の女性の意図を離れて、女性全体としては、ジェンダーの落とし穴 (gender trap) に落ち込むかのようだ」[: 176]。

この指摘は、当事者であるOLたちの表出する抵抗戦略に対し、安易な楽観主義をとらず、鋭い。だがその他方、小笠原の議論ではインフォーマントたちの行為のみが重視され、その背後にある彼女ら自身の意味づけにはじゅうぶんな注意が払われていない。そのため、「レジスタンス」とその効果の判断は、観察者／分析者に一方的に委ねられ、ここでは企業内のジェンダー不平等の是正にのみ焦点が当てられている。しかしながら、異なる角度から企業内の女性をみる調査研究においては、「レジスタンス」のより多元的な位相が明らかにされてもいる。³ アメリカ企業で専門職に従事する女性たちを対象とした A. Treathwey は、フーコー派フェミニスト理論を採用し、女性たちの「規律化された身体 disciplined bodies」に注目する。職場において身体は、メッセージを伝達し読まれるものであるため、女性たちはそこに「女性性」ではなく「専門性」を書き込まねばならない。均整の取れた、性的要素を排除した身体を保持することによって、彼女らはプロフェッショナルとしての自己を獲得していくのである [Treathwey 1999]。彼女の分析はこのように、「専門職の女性たちの身体が、組織的文脈のなかで標準化され、従順なものに転じていく様子」を強調し [: 446]、小笠原の「レジスタンス」論とは対極に位置するかのように見える。しかしここで報告されている、規律化から外れる女性たちの存在に注目してみよう。たとえば、「私は女性らしくするのは大切なことだと思う」と言明するインフォーマントは、一方で「女性性」と「専門性」が異なることを認めながらも、その両立が可能でありむしろ重要であると主張している [: 441]。また、職場では忌避されるはずの「性的要素／女性らしさ」をともなう装いを好み「無性にはなりたくない」と言う女性は、その他方で、女性性だけに自己を

還元されることに反発してもいる [: 444]。「身体の規律化」という単線的過程から外れるこうした事例に対して、Treathwey は依然として、性的であることは規律の不足を意味するため彼女らに緊張や葛藤をもたらす、と言及するに留まっている。その意味では彼女と小笠原は同様に、ノイズを回収する制度や構造の側に力点を置いているといえよう。しかしながら、ここで言われていることはそれほど単純ではない。むしろこれらのインフォーマントが示唆するのは、読まれるものとしての身体が、まず、常に従順に標準化されていくのではないということ、そして、相反すると考えられている「女性性」と「専門性」を共存させる身体があるということである。単線的な従属のみを看取ろうとする観察者の枠組みは、こうしたリアリティの前に動揺せざるを得ない。

以上で取りあげたケースがいずれも職場という文脈に置かれている以上、規律や規範への従属が多く観察されるのは当然といえよう。また、そうしたなかでも「レジスタンス」が見出されることは重要である。しかしながら、実際のフィールドとその参与者たちにアプローチしながら、表出された行為——男性社員とどう関わるか、どんな服装を選ぶか、など——にのみ照準していたのでは、結局のところ当事者たちによる行為や発話を「従属か、抵抗か」に振り分けるに留まってしまう。だが、上にみたように、当事者自身がその行為や発話に付与する意味は、観察者の単純な枠組みを越え、新たな可能性を示唆しているのである。それをこそ、汲み取っていかねばならない。

職場における女性の身体を同様に扱いながら、J. Brewis と J. Sinclair は彼女らのアイデンティティを追うことで、より当事者の意味世界に肉迫している [Brewis & Sinclair 2000]。ここでもまず目を引くのは、「女性はこうあらねばならない、というルールを破るのは快適」と、明示的に抵抗を語るケースである。これに対して Brewis と Sinclair は、彼女が「女性らしくない容姿」を克服してこう語るようになったことに注目し、ここにパフォーマンスの理論を援用する。すなわち、「ジェンダー規範の断続的なパフォーマンスは、規範そのものを強化するが、抵抗への機会にもつながる。…主体として生産されることによって、私たちを主体として生み出

す規範に対して抵抗することもできるようになるのだ」[: 199]。このインフォーマントは、「女性らしい容姿」という規範的言説のなかで「女性」として主体化されてしまったが、それゆえに規範に抵抗する主体ともなり得た、と。だが、もしここで「私も女性らしい姿で生まれたかったのに」と語ったとしたら、その「主体」は、異なる扱われ方をしたに違いない。実際、BrewisとSinclairの分析には、「職場で男性と同様に装うことは楽しかった」、「職場においては自分の女性性を抑圧し、無性になる」と語るケースを、規範への「従属」としてのみ捉えるなど、前出の論者たちとの類似性がみられる。このようにパフォーマンスの理論も、本来はその両義的帰結を言うものであったにもかかわらず、依然として「従属か、抵抗か」の文脈に置き換えられ、さらには調査者が一方的に「抵抗」のみを肯定的に評価することが少なくない。

しかしながら、BrewisとSinclairの分析はこれに加えて、「職場で女性的身体を持つことは必ずしも問題ではない」とする回答にも注目する[: 203]。「女性という存在それだけで魅力になる」「意味ある存在として自分をアピールできる」、あるいは「独自の道を開くことができる」という語りはいずれも、従来ネガティブに価値づけられてきた、職場における「女性性」に対して、新たな価値や意味を見出そうとするものである。当然ながら、「女性らしさ」は諸刃の剣であり、それを理由に彼女らが被る不利益が直ちに軽減するわけではない。しかしそれを熟知しながらなお、女性的身体を規範に沿って標準化するのではなく、敢えて引き受けつつそこにポジティブな意味を見出そうとするインフォーマントたちの語りは、「女性としての彼女らの魅力は、操作すべきものであって、決して搾取されるものではない」ことを示し、力強い[: 204]。BrewisとSinclairが女性的身体の多義性をこそ結論に据えたのは、こうした女性たちのリアリティをじゅうぶんに汲んだ結果であるといえよう。

2-2. 価値／意味づけ直すこと

以上でみてきたことは、フェミニストによる言説分析に対する厳しい批

判と通底する。S. Widdicombeによれば、ポスト構造主義／ポストモダニズムの方法論は、本来フェミニストの関心であったはずの女性たちによるアイデンティティや経験の語りを聞かず、それらを断片的テキストに帰してしまっている。その分析は、もっぱら研究者が遂行しようとする政治的アジェンダに依存しており、その結果雑駁で恣意的でさえある [Widdicombe 1995]。その例として参照されるのが、N. Gaveyによる「愛のないセックスをする女性」の研究である。そこではインフォーマントの女性が、インタヴューの要請に応じて自分の性行動が愛情を伴わないことを認めながらも、同時に「セックスは生理的現象に過ぎない、自分にとっては問題ない」と付け加えている。だが分析において、この女性は後半の語りをまったく考慮されずに「無力な被害者」としてのみ解釈されている [: 108-111]。また、Widdicombe自身が行った「パンクの若者」に対するインタヴュー調査では、インフォーマントの「抵抗」が、学術的に言われているように階級文化に対してではなく、実は「パンク」に対して研究者が読み込む過剰な政治性や対抗性に対してなされていたということも明らかになる [: 113-122]。このように、日常生活世界のリアリティは、調査者の予期や前提にすべて回収できるものではない。⁴「明示的なフェミニスト的、あるいは他の政治的視座を採用して当事者の語りを解釈すること」は厳に慎まれなければならない [: 107]。

こうして女性たちのリアリティに対し、過度に抑圧や従属を読み込むことをやめたとき、私たちはふたつの重要な発見に至る。第一に、「女性であること」が個別具体的な文脈のなかで、肯定的に積極的に活用されているということ。そして第二に、「女性であること」の意味それ自体が、そのつど再定義されながら生きられているということ。B. Skeggsによる労働者階級の女性に対するエスノグラフィーは、この価値と意味の多元性を、きわめて鮮やかに描き出している [Skeggs 1997]。彼女はまず、ポストモダン理論やパフォーマティヴィティ論を駆使する理論家たちが、知識分配における制度的権力者に他ならず、労働者階級の女性たちの現実を、その理論に適合するかたちでのみ解釈してきたと批判する。そして、行為を階級やジェンダーに機械的に還元していくのではなく、そこに伴う喜びや苦し

み、すなわち「不平等の感情に関わる位相」[: 10] を包含するエスノグラフィ調査を実行する。こうした枠組みで捉えられる労働者階級の女性たちのリアリティは、「(中産階級の) 女性性規範」が、従来解釈されてきたのとはまったく異なる意味あいのもとに遂行されていることを示唆する。彼女らは確かに、身のこなしや服装に気を遣い、「女性らしく」見せることに余念がないが、Skeggsはここに、規範への従属を看取しない。なぜならば、「本研究における女性たちが女性性に投資するのは、低俗で、病的で、趣味が悪く、性的な者として位置づけられるのを避けるため、自らがきちんとしていることを証明するためなのである」[: 100]。たとえジェンダー規範を体現していたとしても、それは別の目的のためになされる手段的な行為であって、規範への従属を意味してはいなかったのである。

そうであるように見せることは、そうであるように見えることとは異なる。ある性質を身体化することと演出することの間には、明確なラインがある。[Skeggs 1997: 102]

こうした言わば当然のことが、これほど重要な発見として言われなければならないのは、当事者によるリアリティの語りを取りこぼされてきたからに他ならない。このことが私たちに突きつけるものは大きい。

「女性らしい女性」というジェンダー実践でさえ、新たな価値や意味のもとに「女」を再定義するという発見は、きわめて重要である。J. StaceyとS. E. Geraldもまた、現代のキリスト教福音主義集団に対するフィールドワークを行うなかで、そこに旧来のまま引き継がれている性別役割分業観と、それを実践する女性たちに注目している [Stacey & Gerald 1990]。興味深いのは、これらの女性たちが、伝統的家族観を受け入れ、時にフェミニズムに反論する一方で、中絶や若年妊娠のサポートを積極的に行い、聖書に対しても家父長制を排除した読解を試みているという矛盾である。したがって、従来のように表面的な主張や実践だけを取り上げ、彼女らを反フェミニストとみるのは間違っている。むしろ、「動揺と変化を持ち込む人々」、あるいは「草の根のフェミニスト活動家」としてみるのであり得るのである [: 111]。ここでもまた、規範の遂行はその直接的再生産を意味し

ていない。

さらに重要なのは、こうした行動に対する、女性たち自身の意味づけをみることである。敬虔な福音主義の女性たちによる次のようなことは、きわめて印象深い。「より大きな親密さと安全を手に入れるためなら、家長制的権威を受け入れることなんて、大したことはない」[: 107]、「夫に仕えているのも私自身の選択であり、神の教えに沿うためのこと。この位置を自ら望んだのであって、私たちはドアマットではない」[: 111]。ここに含意されているのは、彼女らが希求する「親密さや安全」を無価値なものとして断定し、さらに彼女らを「ドアマット」と見なそうとする、権威的な視線への反発である。そのなかには、フェミニズムというもうひとつの権威も含まれているに違いない。こうした言明を前にしてなお、彼女らの日常実践を普く規範の内面化や無意識的従属として解釈することは、果たしてどれほどの意味を持ちうるだろうか。

女性たちが自らのことばで表出する、リアリティに内包される意味や価値の豊穡。以上でみてきたのは、実践される行為や発話が、決して「従属か、抵抗か」の二者択一では把握することのできない、多元的なものだというのであった。「抵抗しながら従属する」という危険性や、「従属しながら抵抗する」という可能性があることも示唆されたのである。私たちは確かに、抵抗を回収しながら綿々と続く、権力的な再生産構造の強さを思い知るが、それと同時に、規範の侵犯や棄却だけが方途でないことにも気づかされる。さらには、慣習的なことばを反復するのではなく「わたしたちがけっして選ばない言葉」を獲得すること [Butler 1997=1998: 39]、あるいはアイデンティティに対して、「その生産過程を分析し、それを通じて権力の構築や権力との葛藤を分析すること。そしてまた、主体の存在を規定し解釈するとされている、アイデンティティの自律性や安定性にも疑義を呈すること」[Scott 1995: 8]、こうした戦略が、職場の、労働者階級の、あるいは宗教に身を投じた女性たちにとっては、疎遠なものであることも無視できない。それでも彼女らは、ただ受動的に従属的位置におかれ抑圧を耐え忍んでいるだけではなかった。より彼女らの意味世界に適合したかたちで、ジェンダーを実践しながら調整を行っている。そうした日常生活世

界の、単線的でない、動態的な過程に注目するとき、「女」をめぐる争いとしてのフェミニズムは、再びリアリティのただなかに息づき始める。

3. 相互行為の豊穡——「日本女性」を事例に

3-1. ステレオタイプから当事者へ

「女」というリアリティの存在が、理論的な精錬を受けて棄却あるいは脱構築されたとしても、直ちにそれが日常生活世界から立ち消えるわけではない。私たちは今、言語によって形づくられてしまった、まさに「リアルな」ものとしてのジェンダーを注視しようとしている。この方向性は、「ジェンダーの困難」に対峙し緻密な検証を行う加藤秀一の、次のような言明に共鳴する。

もちろん、ここで万能の処方箋を提示することはできない。だが、「産みの母」のようなカテゴリーを、本質主義のリスクを冒してでも〈共犯的批判〉のために用いること、すなわちそれを、規範的女性役割から差異化しつつ、全域的でもなく拘束的でもない、「さしあたるの」「文脈上の」有効性に基づいて用いるということは、フェミニズムの基本理念に対する裏切りではないと言うべきではないか。[加藤 1998: 154]

「女性たちのリアリティ」を、敢えてそれとして同定しその深部に分け入ることによって、初めてそれを理解することができるはずだ。

ここでひとつの事例を取り上げ、以上で提起してきた枠組みが、いかなるリアリティを見出し、さらにどのように従来の枠組みを超えるかをみていこう。対象とするのは、まさに「抑圧され、従属的な地位に置かれ、従順」というステレオタイプを、長く国内外で付与されてきた「日本女性」である⁵。現代においてなお、伝統的な女性性を堅持しているかのような彼女らは、「光のなかに隠れているかのように不可解な存在」として [Skov & Moeran 1995]、あるいは「はかなさと強靭さを兼ね備えた鉄の蝶」として [Diggs 1998]、多大な学術的関心を集めてきている。広く社会学、人類学、

歴史学などが交わる学際的なフィールドとして、今や「日本女性研究」はひとつの学術領野をなすといってもよいだろう。

ここで特に注目すべきは、こうした（多くの場合海外の研究者による）議論の多くが、ステレオタイプを超えようとする反面で、依然として伝統的なクリシェに基づいている点である。「同質的」「現状維持志向」「集団主義」「調和的社会関係」「仏教的発想」「儒教の影響」「甘え」などの鍵概念を、じゅうぶんな検証なしに採用する限り、こうした議論は「日本人論／日本文化論」の再生産に与してしまっているといえよう〔ベフ 1987、杉本 1996〕。これとは対照的に、オリエンタリズム〔Said 1978=1993〕の議論を援用し、「日本女性」のステレオタイプが「西洋」と「男性」という二重の権力によって歴史的に構築されてきたことを指摘する議論がある〔島津 1996、上野 1998〕。ここからは、「日本女性」がどのような人々かという問いは棄却され、そのカテゴリーが言語／言説によって創られたものに過ぎず、そこに付与されたイメージは虚構であり幻想であるということが強調されることとなる。

「日本女性」という「女」もまた、同質な集団ではない。紋切り型を拒否し、本質的な「日本女性性」なるものを否定するうえで、この主張はきわめて有効である。しかし同時に、そこから「日本女性」を語ることでそれ自体が棄却されるのでは、「女」に関してみてきたのと同様に、新たな問題が生じることとなる。すなわち、偏向したイメージや一方的なカテゴリー化に対して、その歴史的文化的構築性にだけ目を奪われると、それが既に制度化され、自明の存在として「リアルな」ものとして、生きられていることを見落としてしまう。この陥穽から逃れるためには、「日本女性」が顕在化する具体的場面に定位し、そこに参与する人々の生きられた経験に特化する必要がある。問いはさらに次のように置き換えられる。「日本女性」として自己、あるいは他者を同定する社会的場面において、その参与者たちはいかに行為し、その経験をどのように語るのか。照準すべきは、もっとも実践的な、そして「リアルな」、相互行為という位相である。

3-2. パフォーマンスの意味——多義性と非一貫性

「日本女性」が顕在化する具体的な場面では、いったい何が起きているのか。以下で引用するのは、筆者が独自に行った「日本女性」に関するインタビュー調査のデータである。インフォーマントは、ナショナルリティとジェンダーが有意味化すると考えられる社会的相互行為場面——国際的組織での活動、異文化交流のイベントや集まり、語学学習、海外旅行など——の経験者とし、「日本人女性 (JWと略記)」32名、「日本人男性 (JM)」6名、「外国人女性 (FW)」11名、「外国人男性 (FM)」19名を含む⁷。ここでは日本人女性インフォーマントによる語りを中心に、議論をすすめよう。

まず注目すべきは、「従順」「謙虚」「意見を言わない」「みんな同じ」「おとなしい」などの古典的な「日本女性」のステレオタイプが、日本人女性たちのなかにも広く浸透しているという点である。しかも彼女らは、こうしたイメージが「外国人」との相互行為において自らに負荷された経験を有しており、それをネガティブなものとして語っている。「日本女性」というカテゴリー／イメージが、実際の相互行為のなかで暴力的なものとして、まさに「抑圧」として、彼女ら自身に感得されていることが確認できるだろう。

日本人の女だと、家にずっといて家事して、一生家にいるんだろうって言われたことある。すごいショックだった、そのとき。[JW3]

やっぱり幼いとかって思われてるみたいで、悪く言えばなめられてるのかなって思うときがある。うん、同じ仕事してる男の人がいても「ちゃんといい子にしろよ」とかいわれたり。[JW16]

こうした事態に対しては、「抵抗」を主張するインフォーマントも少なくない。たとえば次のように、「従順で謙虚な日本女性」を覆すような言明があることは注目に値する。

「私は違うよ」ってまず言うでしょうね、私は違うってことをまず言うと思います。[JW27]

日本の主婦のイメージに対しては、私はもうはっきり「誤解！」って言います、言います。私が言うとうわかってくれるんだけど。やっぱりなって感じで。[JW31]

しかし他方、このように一貫した態度で「抑圧」に臨むことが、それほど容易ではないことも示されている。相互行為場面における他者との関係、優勢な言語や雰囲気など、「抵抗」を阻む要因は少なくない。

そういう雰囲気だったら言い返す。お酒が入ってるときに、冗談っぽく言えるんだったら言う。ケンカ腰に言われたら言わないかもしれない。「そうだね」って。
[JW3]

最初はね、片言だけど、いっしょうけんめい言い返してた。違うんだってことは言いたくてしょうがないのよ、でも、ほんとにわかってくれたのかなって、その、ことばの足りなさを感じて、それで途中でいやになっちゃって。あとは適当に流して。
[JW6]

忘れてはならないのは、彼女らは日常的な相互行為のなかでカテゴリー／イメージと対峙しなければならぬということ、すなわち特定の文脈や権力関係のなかに埋め込まれているということである。自由な発話や行為が許される真空状態に置かれているのではない以上、抵抗はきわめて限定的な戦略であり、従属的地位に甘んじるという事態もまた、彼女らのリアリティには依然として含まれている。

こうしてみると、「日本女性」をめぐる葛藤を考える際にも、再び「従属か、抵抗か」を問うことになってしまう。「日本の女性たちの抵抗は脆く一時的なもので、現状に対して断固として変更を迫るというよりは、オプションを増やすことを目指すものに過ぎない」[Rosenberger 1996: 37]という従来の結論、そして「従順で謙虚な日本女性」のステレオタイプを超えることは、終局的にできないかのようではある。だが、私たちの主眼は、性急に行為や発話の効果を問うことではなく、それ以上の深みをもつ当事者自身の語りに耳を傾けることにあった。そこで吐露されるのは、果たして、抑圧を拒もうとする抵抗と、耐え忍ぶ従属の経験だけであろうか。

まず、「間違ったイメージは必ず正す」と主張する、「抵抗する女性たち」に注目しよう。興味深いことに彼女らは、他方で自らの「日本女性性」を

強調している。

ほんとにでも、帰国の人で「うわあ、この人、日本人じゃない」っていう人とかいるけど、そういうのとは違うから。TPOをわかまえるとか、それは気をつけてる。
[JW19]

そのときにね、私、思ったんだけど、私もやっぱり日本の社会を体で感じて生きてるなって。おじさんたちにはね、生意気っぽくなく、かわいこぶる、じゃないけど、「これでいいんですかあ？」なんて言ってる自分がいたのよ。そういうところもあるのよね、実際。[JW26]

彼女らは決して単純に「日本女性的でない日本女性」ではない。他者によるカテゴリー／イメージの負荷には抗する一方で、積極的に「日本女性らしい自己」を語る時、彼女らは矛盾した自己を呈示する。この非一貫性にこそ、注目しなければならない。

このことは、「抵抗できない女性たち」にも当てはまる。彼女らは他者の面前では「日本女性」に従属することを余儀なくされながらも、他方で、——同じ日本人女性である調査者に対しては——それが演技に過ぎないという舞台裏を披露し、さらにそのパフォーマンスに回収されない自己も打ち出そうとする。

私は普段は全然言わないですよ。ある程度言われても許してあげる。「はい、はい」って言ってかわいいふりをしてあげるんですけど、ここで言わないとってときには、すごいきちんと自分の考えてることをまとめて、ちゃんと話すようにする。[JW24]

また、次のようにネガティブなステレオタイプのもとに捉えられがちな「日本女性」を、肯定的に価値づけて相互行為に臨むインフォーマントたちにいたっては、もはやそこに従属や抑圧を読み込むことは不可能である。

でも私なんかは、主婦を悪く思っていないのね、家庭があって子どもがいて、自分の余暇を楽しんでいられるし、不満っていうのはない。ストレスとかっていうのは、ないわよ、全然。[JW20]

このセクターには女性しかいないの？とかね。しょっちゅうきかれます。そしたら

「女性の力を活かしてるの」って。私は構わないです、全然。日本女性だねーって言われても、そうよ、私は日本女性よ、いいでしょって。[JW25]

「日本女性的な日本女性」たちが、実はその背後にステレオタイプを裏切る自己を隠し持つこと、あるいはそれを肯定的に生き活きと体现すること、こうした発見はいずれも、「従属か、抵抗か」を大きく外れるものである。彼女らの生きられた経験は、単純な枠組みでは決して捉えきれない。

3-3. 解釈の広がり

当事者たちの語りは、これまでの日本女性研究が取りこぼしてきた多様性や複雑性を示唆するものであった。しかし、それらが全てカテゴリー／イメージを壊乱すると直ちに推測することは不可能である。むしろ、「日本女性的な日本女性」がそのままステレオタイプを固着化させ、「日本女性的でない日本女性」はただ例外として無視されるという事態も、じゅうぶん考えられる。さらに次のように語る「外国人男性」のケースから窺えるように、直接的な抵抗でさえ、理解できない出来事として処理され無意味化されることがある。

ある日本人の女友達が、料理とか部屋の片付けとかをしてくれた。自分はイメージどおりだと思って、「男性が上で女性が下」というのを思い出して、「やっぱり君も日本女性だね」と言った。そしたら彼女が急に怒り出して「私は日本女性だからやったんじゃない！」って。今でもよく理解できないんだけど、別に悪いことだと思って言ったわけじゃない。イメージ通りでもいいと思う。[FM14]

だが、それだけでは決してない。次の「外国人女性」インフォーマントたちは、日本女性の行為や発話がパフォーマンスに過ぎないことを見抜いており、ステレオタイプが幻想に過ぎないことを——学術的政治的な言説としてではなく——きわめて実際の知識として表明する。

日本女性の外国人に対する振る舞いは演技だと思う。いつも一生けんめいに good show をみせてくれる。だからたいいの外国人はほんとうの姿をみてはいない。

騙されてるのね。[FW6]

イメージどおりの人になんて会ったことがない。みんなそういうふりをしているだけ。5分経てばたちまちシャイでも静かでもなくなるんだから。[FW8]

こうしてみると、「日本女性」として行為する人々だけでなく、それを受信し解釈する人々もまた、一様ではない。さらに個人間の差異だけでなく、「日本人女性」インフォーマントの自己呈示が非一貫的であったように、そして「外国人」インフォーマントがイメージの変容や消滅も語ったように、個人内においても、「日本女性」をめぐるリアリティは一定ではない。さらに高次には、暗示的明示的な権力関係や役割規定、そして常識知 [Grafinkel 1967=1987] や相互行為儀礼 [Goffman 1967=1986] が張り巡らされてもいる。そうした只中にある以上、人々が織り成す相互行為は、きわめて複雑な過程に満ちたものであり、常に隅有性を秘めているよう⁸。私たちは、そのもつ広がりど深みを損なわないように、動的的に生起するリアリティをひとつひとつ拾い上げるのみである。

4. <葛藤と交渉>のフェミニズム

本論文では、現代社会におけるフェミニズムの困難を、経験的にも理論／方法論的にも認めたとえで、それを克服するための方途を「女性たちのリアリティ」のなかに模索してきた⁹。ここで強調されなければならないのは、これまで自明視されてきた「抑圧」や、それに対する「従属／抵抗」という枠組みが、実は、生きられる経験の多様性や複雑性を削ぎ落とし、しかもそこに一方的な意味や価値を読み込んでしまうという危険性である。そうしたフェミニズムのまなざしに対する直接的な批判や反駁は、実は、「普通の女たち」からも多く聞かれている [Stacey & Gerald 1990, Skeggs 1997, 北村 2001]。女性たちが「私はフェミニストではないけれど… (フェミニスト的なことをしたり信じたりはしている)」というレトリック戦略を多用する現在 [Widdicombe 1995: 124]、「抑圧」や「抵抗」を言うことの政治的意義や重要性をじゅうぶんに認める一方で、再び、そこに汲まれない女性たち自身のリアリティにアプローチする必要があった。

私たちはここで、構造や権力に還元されない多義的な過程として把握するために、そしてより当事者のリアリティに即するために、「抑圧」を含みこむ一連の問題状況を〈葛藤〉と、そしてそれに対峙する人々の行為と発言を、「抵抗」と「従属」に限定せず、〈交渉〉と呼ぼう。それは、行為者間だけでなく、行為者内で、そして制度や規範に対しても、恒常的に生起するものに他ならない。そうした日常実践がもたらす動揺をみた以上、フェミニズムの目指したものをそこに看取することは決して不可能ではない。

この点においては、F. GinsburgとA. L. Tsingによる「ジェンダー交渉 negotiating gender」という考え方がきわめて意義深い¹⁰。それは第一には、「特定の、そして多くの場合葛藤する利害の遂行において、人々がジェンダー化されたことばや社会関係を再定義しようとする事」を指し、そして第二に、「自らがよって生きる観念や制度のなかで苦闘すること」を示す[Ginsburg & Tsing 1990: 2]。すなわち、〈交渉〉とは攪乱や変化の契機を大いに含むものだが、同時に、今ここにある〈葛藤〉を切り抜けようとする実際的な試みでもあるのだ。こうした多義的な、しかし力強く確かな日常実践にこそ、私たちは前進するフェミニズムを見出す。パフォーマンス性が発現する個別具体的な場、それを丁寧にまなざす経験的調査研究を通じて、ついに私たちは、フェミニズムの困難から飛翔する。「普通の女たち」の経験を、そのままに携えて。

註

¹ ジェンダー理論の展開をより詳細に論じたものとしては、[上野1995] [加藤1998]などを参照。

² (社会)心理学を中心に、その理論と実証における成果を所収したものに、[Wilkinson & Kitzinger eds. 1995]がある。特に、C. KitzingerとA. Thomasによる「セクシュアル・ハラスメント」の当事者定義に関する調査研究は、そのことばが女性たちを被害者化してしまうため実は女性たちに忌避されていること、ならびに男女間の意味づけの差異などを微細に読み取っており意義深い [Kitzinger & Thomas 1995]。

³ 当然ながら、各論者が対象にするフィールドの差異（「文化」や職種などの違い）を認める必要はある。しかしその経験的発見ではなく、パースペクティブを対照させるうえで、差し当たりそれを勘案せずに議論を進めることができるだろう。

⁴ インフォーマントが、調査者の予期どおりにアイデンティティを構築しないという興味深い事

態を報告するものとして、[Paoletti 1998] も参照。また、会話における動的なアイデンティティの(不)構築過程を実証的にみる [Antaki & Widdicombe eds. 1998] の貢献は大きい。

⁵ 本節の議論の詳細は、[北村 2001] に記した。

⁶ 「日本女性研究」の主なものとしては、[Bernstein ed. 1991] [Skov & Moeran eds. 1995] [Imamura ed. 1996] などが編まれている。

⁷ いずれもエスニシティ、年齢、学歴、職業などは多岐に渡るが、これらの変数は統制しておらず、分析で用いることもない。「どのような人がどのように参与しているか」ではなく、あくまでも「参与者たちの語る相互行為はどのようなものか」に主眼をおいている。

また、「外国人／日本人」「女性／男性」というカテゴリーは、日常生活世界の経験に即したものと採用している。特に「外国人」は、日本在住1年以上の英語話者に限定した。これは、調査者の言語能力の問題であるとともに、日本において「外国人／ガイジン」と「英語で話す人」が相互交換的に使われる頻度が高いことを念頭において、「外国人＝西洋／欧米人＝ガイジン」として扱われることが相対的に多いだろう人々に焦点を絞ることを目的としている。

⁸ ここでの知見は、従来の社会学的相互行為論に対しても新たな視角を持ち込む。これまでエスノメソドロジーにおいては、行為者が協働で営む安定した相互行為過程が強調されてきた。(「人は、守るべき面子を与えてくれた状況に参入することによって、彼の前を流れていく出来事の波を監視する責任を負うことになる。彼は、ある意味秩序を維持するようにつとめねばならない」[Goffman 1967=1986: 6]、あるいは「人々は自分の望みとは無関係に、つまりは「好むと好まざるとにかかわらず」それに従うとみなされている」[Garfinkel 1974=1987: 230] など。)しかし本論文で参照した経験的研究は、筆者自身のものも含めて、こうした予定調和的で静態的な相互行為とは異なるリアリティを看取している。

⁹ ジェンダーに限らず、同様のことは他の社会的属性に関しても、言えるだろう。エスニシティの相互行為的構成／言語的構築に関しては [Brah, Hickman & Mac an Ghaill eds. 1999] を参照。

¹⁰ 岡真理は、次のように「交渉」を定義する。

ここでいう「交渉」とはむしろ、その交渉を通じ、彼我のあいだの既存の関係性それ自体が解体され、再編成されていくような、ひいては、交渉する主体のありようまでもが、新たな、別のなにかに変貌を遂げる、そのようなものとして考えられている。[岡 2000: 19]

筆者はこの動的な捉え方に概ね賛同するが、しかし「女性たちのリアリティ」が他方で示唆していた危険性、すなわち「彼我の間の関係性」や「主体のありよう」がそのままに再生産され固定化されるという帰結も、射程に収めようとしている。＜交渉＞は、岡の言うようにパフォーマンスな過程に他ならないが、同時にあくまでも尚義的なものであることを忘れてはならないだろう。Ginsburg と Tsing は、この点への配慮を欠いていない。

参考文献

- Antaki, C. & S. Widdicombe, 1998, *Identities in Talk*, Sage.
- ベフ, ハルミ, 1987, 『イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社.
- Bernstein, G. L. eds., 1991, *Recreating Japanese Women, 1600-1945*, University of California Press.
- Brah, A., M. J. Hickman & M. Mac an Ghail eds., 1999, *Thinking Identities: Ethnicity, Racism and Culture*, Macmillan.
- Brewis, J. & J. Sinclair, 2000, "Exploring Embodiment: Women, Biology and Work," in Hassard, J. R. Holliday & H. Willmott eds., *Body and Organization*, Sage.
- Butler, J., 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. = 1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.
- Butler, J., 1997, *Excitable Speech*, Routledge. = 1998, 竹村和子訳「触発する言葉——パフォーマティブイティの政治性」『思想』892.
- Delphy, C., 1991, *Penser le genre: quels problemes?, Sexe et genre, De la hiérarchie entre les sexes*, édité par Hurtig, Kail, Rouch, Editions du CNRS. = 1998, 杉藤雅子訳「ジェンダーについて考える——なにが問題なのか?」棚沢直子編訳『女たちのフランス思想』勁草書房.
- Diggs, N. B., 1998, *Steel Butterflies: Japanese Women and the American Experience*, State University of New York Press.
- Imamura, A. E. ed., 1996, *Re-Imaging Japanese Women*, University of California Press.
- Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall. = 1987, 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソロジー——社会学的思考の解体』せりか書房.
- Ginsburg, F. & A. L. Tsing, 1990, "Introduction," in Ginsburg, F. & A. L. Tsing eds., *Uncertain Terms: Negotiating Gender in American Culture*, Beacon.
- Goffman, E., 1967, *Interaction Ritual*, Doubleday Anchor. = 1986, 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局.
- Hollows, J., 2000, *Feminism, Femininity and Popular Culture*, Manchester University Press.
- 加藤秀一, 1998, 『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房.
- Kavka, M., 2001, "Introduction," in Bronfen, E. & M. Kavka eds., *Feminist Consequences: Theory for the New Century*, Columbia University Press.
- 北村文, 2001, 「創られるイメージ/生きられるイメージ——<日本女性>をめぐるイメージとアイデンティティの社会的構成」東京大学大学院人文社会科学系研究科社会学修士学位論文.
- Kitzinger, C. & A. Thomas, 1995, "Sexual Harassment: A Discursive Approach," in [Wilkinson & Kitzinger eds., 1995].
- 小笠原祐子, 1998, 『OLたちの<レジスタンス>——サラリーマンとOLのパワーゲーム』中公新書.
- 岡真理, 2000, 『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』青土社.
- Paoletti, I., 1998, "Handling 'Incoherence' According to the Speaker's On-sight Categorization," in [Antaki & Widdicombe eds., 1998].

- Rosenberger, N. R., 1996, "Fragile Resistance, Signs of States: Women between State and Media in Japan," in [Imamura ed., 1996].
- Said, E. W., 1978, *Orientalism*, Aitken, Stone & Wylie. = 1993, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社.
- Scott, J. W., 1988, *Gender and the Politics of History*, Columbia University Perss. = 1992, 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社.
- Scott, J. W., 1995, "Multiculturalism and the Politics of Identity," in Rajchman, J. ed., *The Identity in Question*, Routledge.
- 島津山美子, 1996, 「国際社会で活躍する日本女性——アートを中心に」山下悦子編『女と男の時空IV現代』藤原書店.
- Skeggs, B., 1997, *Formations of Class and Gender: Becoming Respectable*, Sage.
- Skov, L. & B. Moeran eds., 1995, *Women, Media and Consumption in Japan*, Curzon Press.
- Stacey, J. & S. E. Gerald, 1990, "'We Are Not Doormats': The Influence of Feminism on Contemporary Evangelicals in the United States," in [Ginsburg & Tsing eds. 1990].
- 杉本良夫, 1996, 「日本文化という神話」井上俊・上野千鶴子・大沢真幸・見田宗介・吉見俊哉編『日本文化の社会学』岩波書店.
- Treathway, A., 1999, "Disciplined Bodies: Women's Embodied Identities at Work." *Organization Studies* 29 (3).
- 上野千鶴子, 1995, 「差異の政治学」井上俊・上野千鶴子・大沢真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ジェンダーの社会学』岩波書店.
- 上野千鶴子, 1998, 「偏見報道を生む7つの要因」『笑われる日本人——【ニューヨーク・タイムズ】が描く不可思議な日本』ジバンク.
- Widdicombe, S., 1995, "Identity, Politics and Talk: A Case for the Mundane and the Everyday," in [Wilkinson, S. & C. Kitzinger eds., 1995].
- Wilkinson, S. & C. Kitzinger eds., 1995, *Feminism and Discourse: Psychological Perspectives*, Sage.